

思い出の座間

(相模川編)

座間で写真が一般的になったのは戦後に入ってからです。それ以前は写真に接する機会のごく一部の人に限られており、何かの記念に厚木や横浜などの写真屋へ出かけたり、出張して来てもらって撮影するのが一般的でした。従って人物写真が多く、風景や出来事を撮ったものはごく少ないのですが、可能な限りアルバムの中からひろい出して編集したのが昭和61年(1986)3月に発行された「目で見える座間」です。

この「思い出の座間」は書籍の「目で見える座間」をホームページに忠実に反映することを基本にしております。

今回は、前回の人々の経済生活編に続き、相模川にまつわる種々の写真をもとに紹介させていただきます。内容は、帰帆、渡し、護岸工事、砂利採取に関する写真とコメントになります。

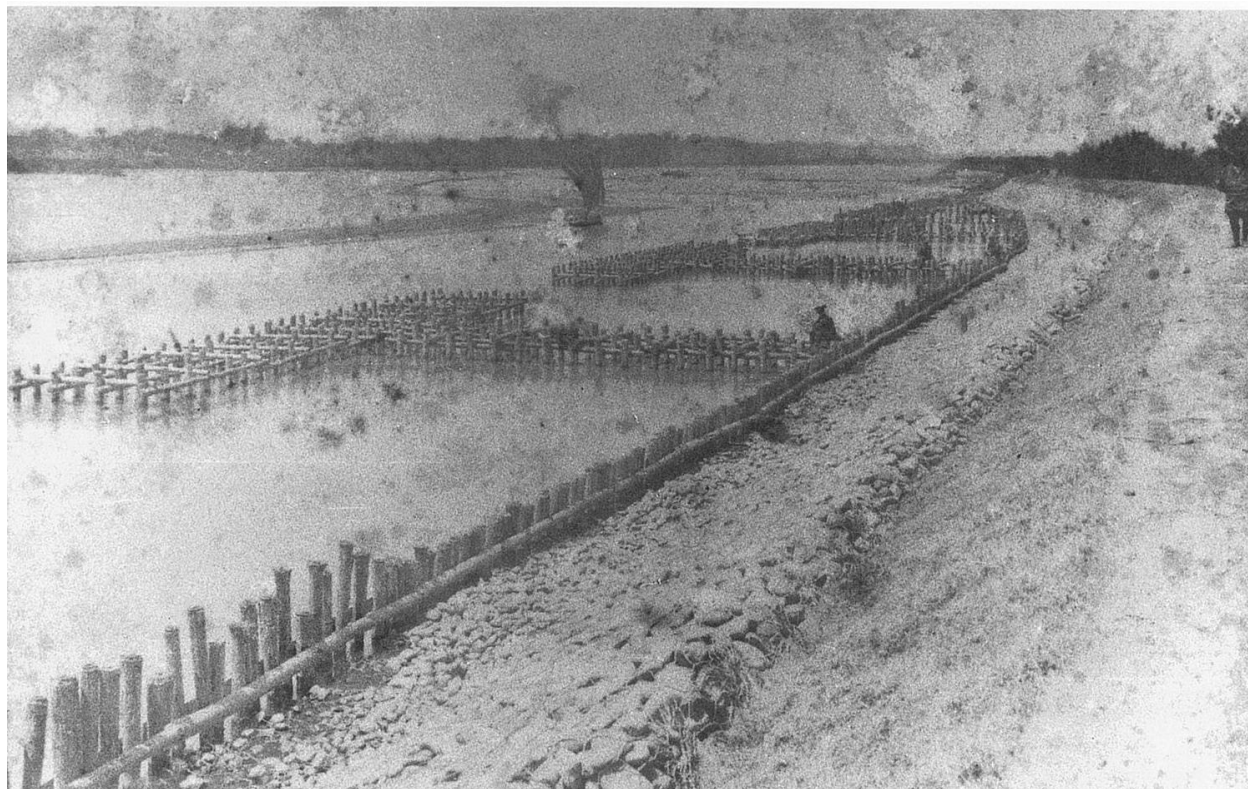
相模川

座間市の西境を流れる相模川は、上流のダム建設によって大きく変貌してしまったが、昔からさまざまな形で人々の生活に影響をおよぼしてきた。



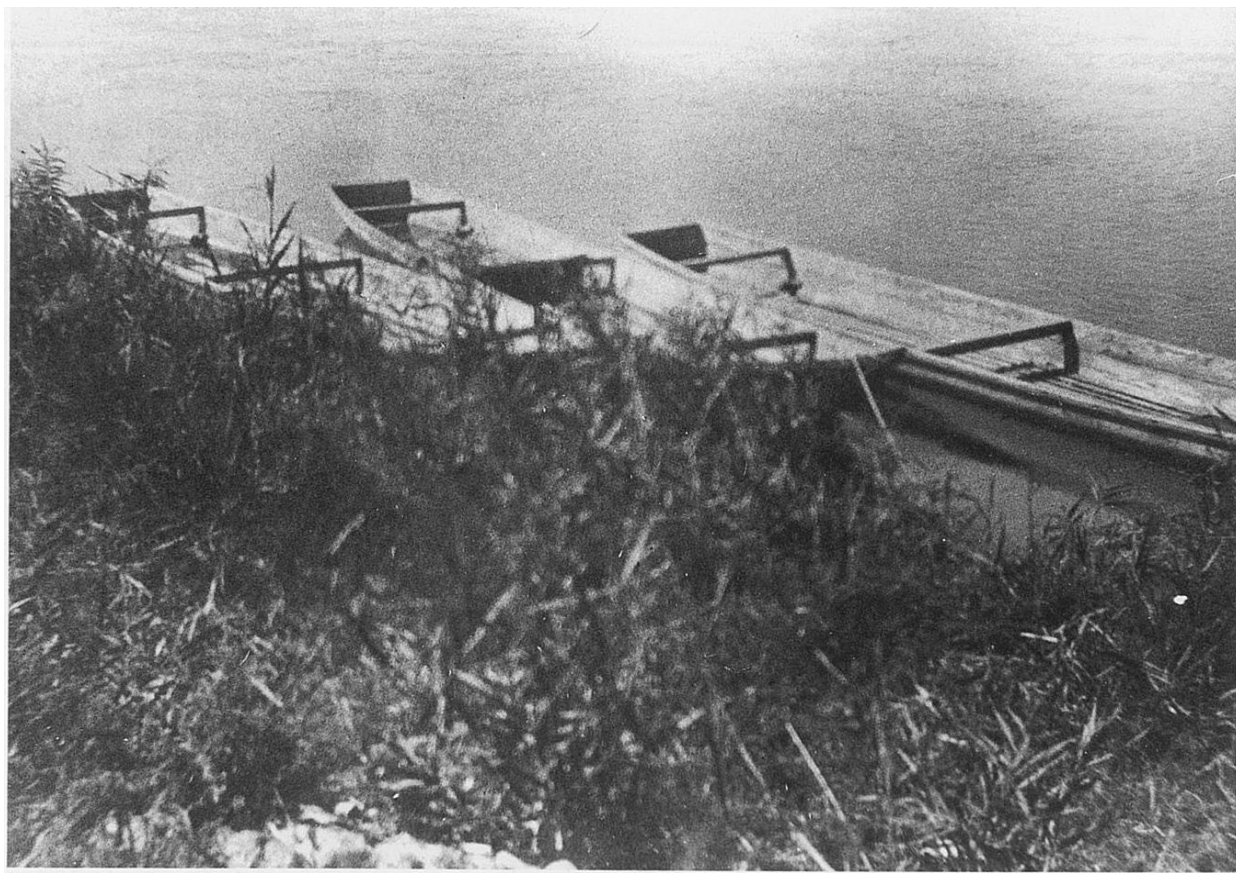
帰帆

写真は四ッ谷の川原を背景とした帰帆（きはん：帰途中の船）。当時は現在よりはるかに水量が多く、川原には草も生えていなかった。また、四ッ谷や新田宿地区では、家の中から土手の上を白い帆が上ってゆくのが見られた。昭和3年ごろ。



相模川の流れと帰帆

新田宿の川原から北を向いて撮ったもの。
沈床工事の完成記念か。川を上る船の帆が美しい。また、船の先で川が大きく厚木側へ蛇行するのがわかる。昭和元年5月撮影。



係留されている川舟

写真は漁や渡船などに使われたもので、サンパ(船)と呼ばれている舟である。また帆のついた船は平田舟と呼ばれていた。

釣人



漁師

川の中へ入っての漁はコロガシによる鮎漁か。昭和5年ごろ、場所は四ッ谷の川原。



蛇籠の上からの釣はカバリか、昭和初期。



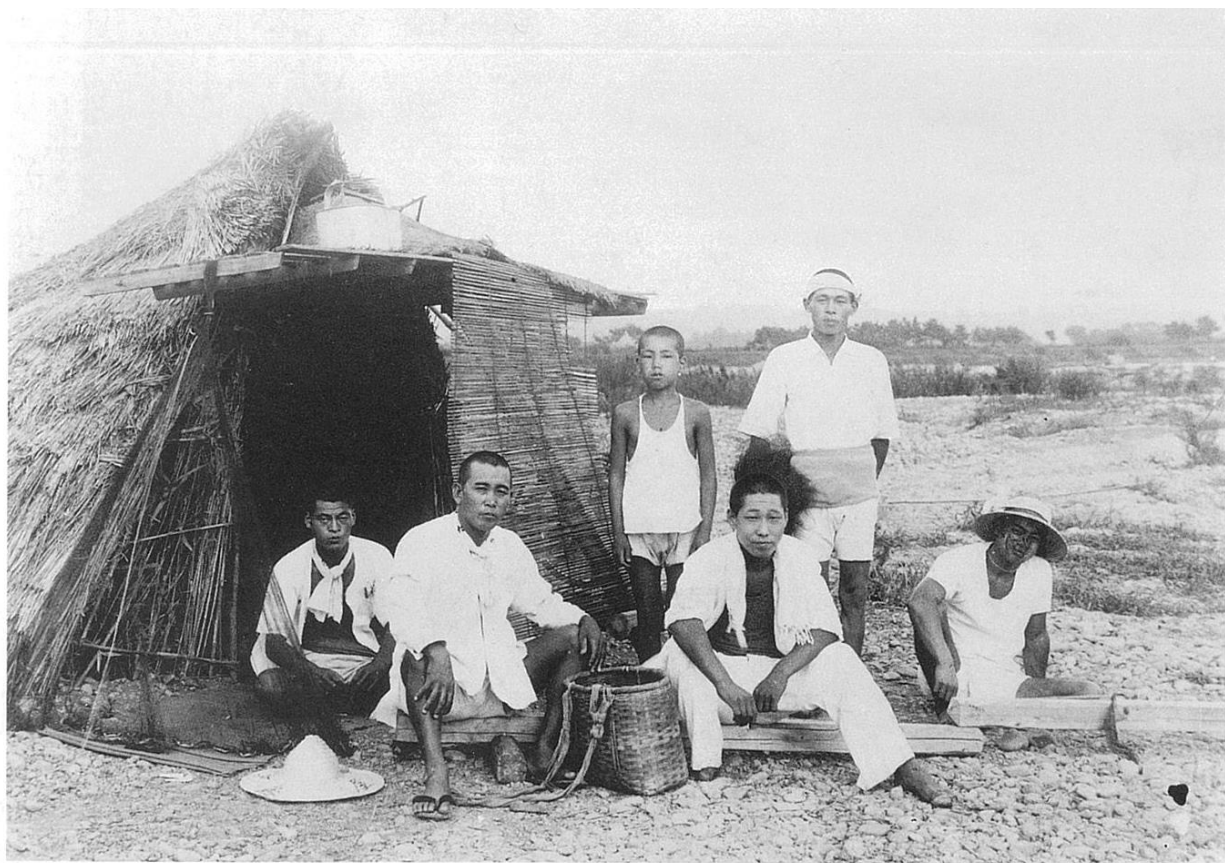
中河原裏の川原から川下を撮ったものか。昭和40
年ごろ。

渡し



新田の渡しと船頭さん

渡し場から対岸の依知を望む。当時は三人の船頭さんが交代で勤務した。大正14～15年ごろ。



船頭小屋 (昭和10年ごろ)



渡し舟にのって

座間小学校の鳶尾山遠足の帰り、依知側から
対岸の新田宿へ渡るところ。昭和26年10月。



座架依橋の完成

昭和34年、長い間の念願であった橋が完成した。座間と依知の一字ずつを取って座架依橋と命名される。しかし、木造であったためすぐに大水で流されてしまった。

洪水



洪水による応急工事

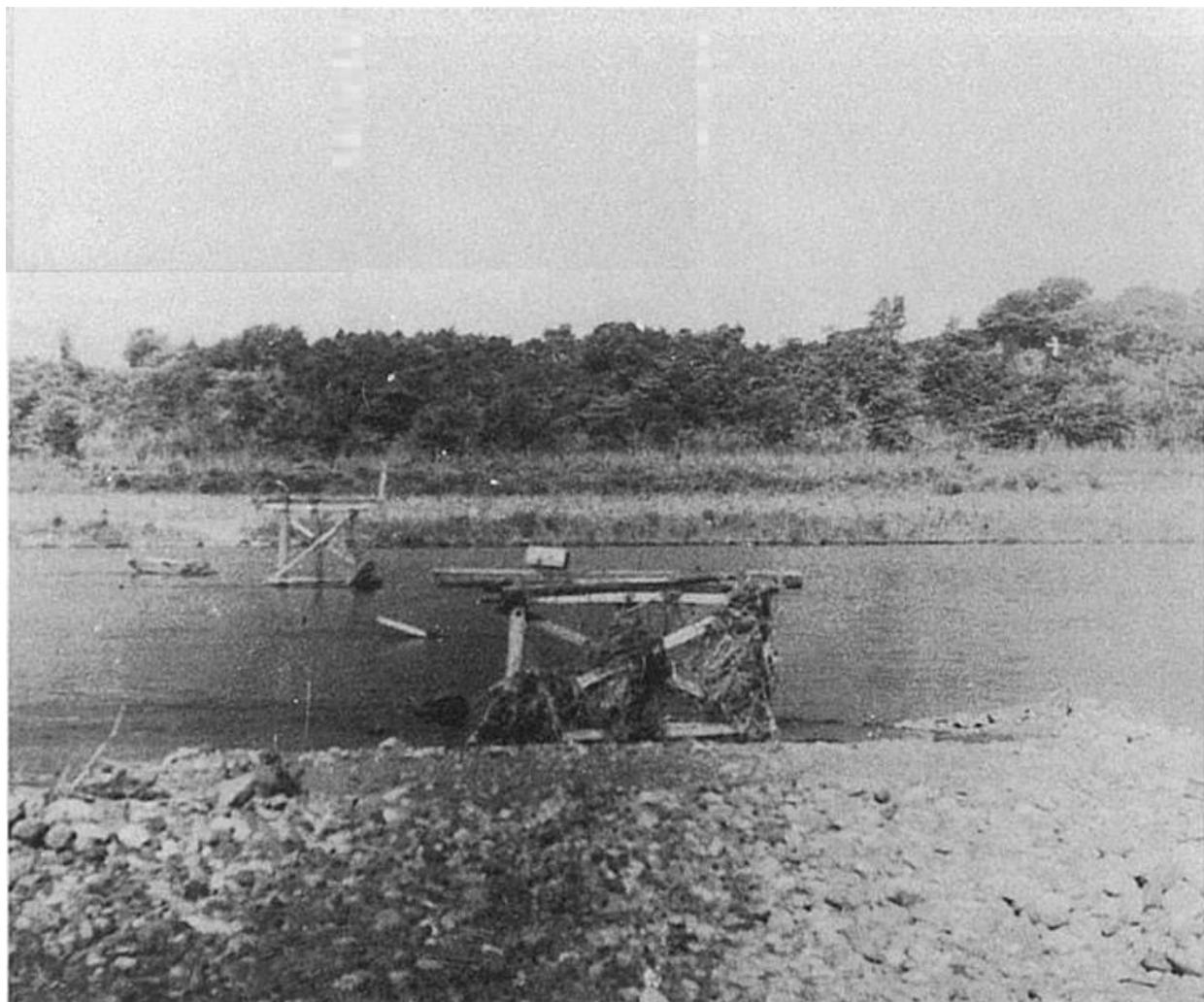
相模川は暴れ川で、昔はたびたび大洪水を起こし、堤防を破り田畑を流失させた。写真は中河原の本堤で、欠壊箇所に土盛り、杭打ちしてその上に土俵を並べ、次の水害を防いでいる。

昭和8年ごろ。



増水した相模川

台風の後であろうか、増水により土手際まで削られ、応急工事をしているところ。昭和30年ごろ。



流された座架依橋

護岸工事



護岸工事記念

護岸工事のうちの沈床工事で、ソダ(木の枝)を束ねて画面右端の箇所固定し、その上に玉石かコンクリートブロックを並べて川の制水を行う。工事は水の少ない冬に行われた。昭和10年ごろ。



沈床工事

ソダを固定しているところで、岸の下まで削り取られているのがよくわかる。昭和30年ごろか。



沈床工事完成記念

工事関係者であろう。水量がものすごく多いことがよくわかる。昭和の初期のものか。

砂利採取



相模川砂利運搬記念

小田急砂利が相模川の砂利運搬のため、相模原市磯部の川原より相武台前駅まで軽便鉄道を布設した。写真はそのときの工事関係者の記念。昭和初期。



相模川とナベトロの橋

採取された砂利はダンプカーが普及するまではナベトロによって、小田急や相模鉄道(国鉄相模線)まで運ばれた。戦後まもなくか。



砂利採取船

四ッ谷付近の川原か。普通は砂利船と呼ばれていた。

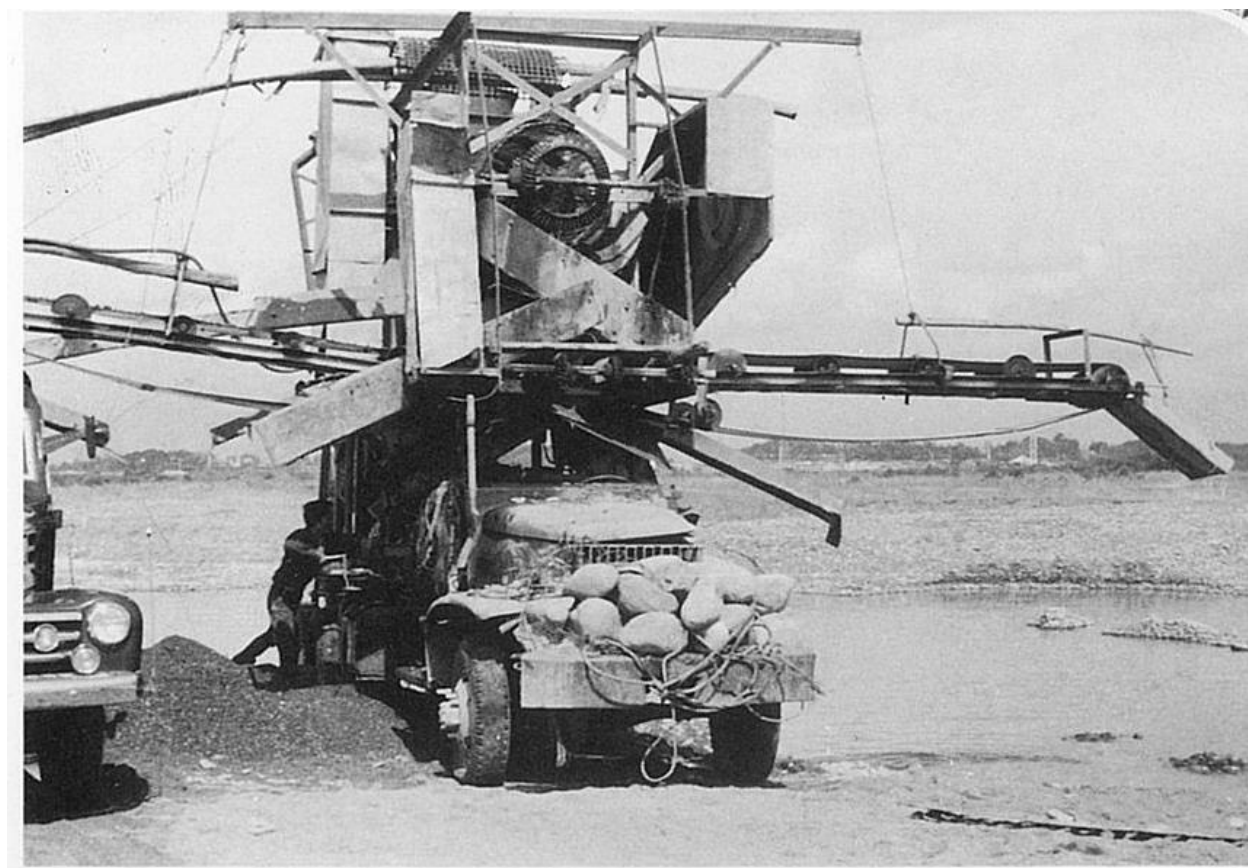


新造の砂利採取船



移動採取機

トラックのボディーに砂利採取機を取り付けたもので、採取した砂利は砂・小石などに分類されて出てくる。昭和30年ごろ。



前方から見た移動採取機



ダンブカー

初期のダンプカーか。昭和30年ごろの撮影だが、砂利は手で積み込まれている。



納涼船

相模川の夏の風物詩である。しかし、最近は水量も少なくあまり見かけなくなった。



早船船体検査記念

早船とは営業用の船で、毎年検査が行われた。
昭和3年ごろ。

相模川編

完